

出張型陶芸クラブの創設

鈴木達也*¹⁾、建木健¹⁾、宇佐美好洋²⁾、佐野美幸³⁾、藤田梢³⁾、縣知子⁴⁾、佐野佑未子⁵⁾

¹⁾ 聖隷クリストファー大学、²⁾ 浜松十字の園、³⁾ 白梅ケアホーム

⁴⁾ 憩いの家だーま、⁵⁾ ワークセンター大きな木

I. はじめに

これまで介護保険下のサービスは外出や遠足など施設外活動が行われてきた。しかし現在介護保険の改定により、通所サービス、施設サービスともに、あくまで「施設内」で実施するように通告がなされたため、施設内の活動が重要視されるようになった。そのためこれまでよりも行える活動に制限が生じている。

趣味活動としての陶芸は高齢者に興味関心が高いものといわれている。しかし、専用の窯は高額であり粘土、釉薬やろくろ等の道具を整えることが難しく、関心が高い割に行うことが困難である。一方で当大学作業療法学科の作業技術学では「陶芸」の授業があるため陶芸窯を使っているが、他の時間は陶芸窯を使用していない。

そこで今回、本大学の作業療法学科の設備を活用し、教員や学生ボランティアが必要な用具を持って該当施設に赴き陶芸を行い、利用者に作りたいものを作って頂き、作成した作品を大学の陶芸窯を利用して焼き上げるという出張型の陶芸クラブを創設したので以下にその成果を報告する。

II. 方法

浜松市内の通所または入居施設を対象に研究協力者が該当施設の利用者に説明し参加希望者を募った。浜松十字の園、白梅ケアホーム、憩いの家だーま、ワークセンター大きな木で行った。実施に当たっては研究代表者、研究分担者、研究協力者に加え施設スタッフや、学生ボランティアの協力を得て行った。実施に際しては乾燥や素焼きの過程があるため「成形」と「色付け」の二度の工程に分け、2週間から1カ月の期間を空けて複数回行った。

III. 結果

実施期間は平成23年9月～平成24年3月。実施回数は18回、延べ260人の参加者と述べ44名学生ボランティアに協力を得て実施した。結果は施設の特徴を踏まえたくうえで報告する

1. 浜松十字の園

浜松十字の園は特別養護老人ホームやデイケアを併設した高齢者の複合施設である。今回は施設内の入居者とデイケア利用者を対象に行った。対象者の多くは認知症による理解力、短期記憶力、判断力低下が主症状であった。取り組みに際しては成形の過程で失敗してしまうことが無い



ように段階付けし、湯呑の型に粘土をつけることで難易度を下げて実施した。色付けの段階では「どのように書いたらよいかわからない」、「自分ではわからない」といった混乱する人や意思表示が困難な者がいたが、見本の絵を用意することでいずれの参加者も好みのデザインを選択することができた。その結果すべての利用者が満足する湯飲み茶わんを作ることができた。実施中はスタッフが対象者のそばに寄り添って行き、楽しみながら行うことが出来た。いつもは受け身的で自分の意思を表出することが少ない利用者が積極的に取り組んでいる姿を見て、スタッフからは驚きの声と利用者に対する賛辞の声が上がっていた。

2. 白梅ケアホーム

白梅ケアホームは介護老人保健施設と通所リハビリテーション施設を備えた施設である。今回施設内の二か所の通所リハビリテーションで行った。一か所では加齢や認知症により身体精神機能面に低下がみられている者が多くもう一か所では CVA や骨折など身体機能面の低下した利用者が多いという特徴があった。ここでは皿、コップ、湯のみ等を見本を見せた後、参加者が作成したい形を白紙にデザインしてもらいそれから成形を行った。片麻痺により片手が不自由な参加者が多かったが軽量ろくろを使用することで片手でも比較的容易に陶芸に取り組むことが可能であった。多くの参加者が思い思いの作品を作る中、ある参加者は亡くなった夫にプレゼントするために作成するとスタッフに伝えており、作品に対する意味を付与する場面が見られた。



3. 憩いの家だ一ま

憩いの家だ一まは地域住民のボランティアによって運営されている無認可のデイサービスである。身体機能、認知機能とも年齢相応に保たれている人が多いため、ここでも参加者が作成したいものを自由に作成した。ここでは合計で2作品が作れるように複数回関わったが、一度目は自分の思ったような作品を作ることが出来ず自信を失う機会となってしまった。二度目に関わった際には「今度こそ飾れるものを作りたい」と本人の強い意志がみられた。さらなる本人の失敗経験とならないようにスタッフと協力して関わることで本人の満足の行く花瓶を作成することができた。本人も「おかげでいいものが作れた。家族に見えるところに飾っておく」と大変喜んでいた。



4. ワークセンター大きな木

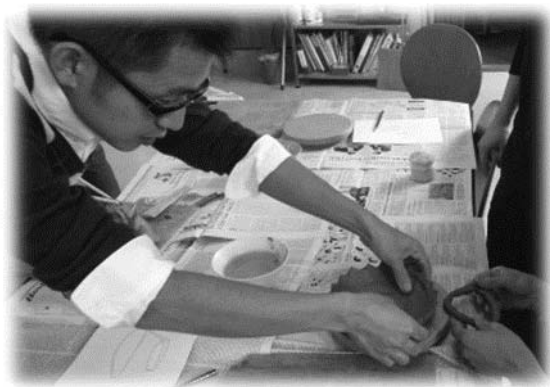
ワークセンター大きな木は高次脳機能障害を持った人のための就労支援、生活訓練施設である。ここでは注意障害や構成力の低下、半側空間無視などの高次脳機能障害を呈する参加者が多いため、

あらかじめ白紙にデザインをした後に成形する方法で複数回行った。ある参加者は自分自身のために作った作品を妻に見せたところ、私にも作って欲しいと言われたと少し照れくさそうに報告していた。

IV. 成果

いずれの施設でも陶芸はこれまで行われていなかった作業活動であり、対象者にとっては初めての作業になることが多かった。実施中は施設スタッフやボランティアの協力を得て共同して行うことが出来た。

成形の過程では型やデザインを描いてから行うことにより、いずれの施設の利用者でも対象者の満足するものを作り上げることができた。一方で色塗りの過程ではいずれの利用者でも困難を訴えることが多かったが、絵付きのマニュアルや見本を提示し説明することによりどの利用者でも満足したものを作り上げることができた。また、いずれの施設でも陶芸は日常的に行われていなかった作業である。しかし施設利用者の中には昔から陶芸に興味を持っていた者、昔やっていたが今は出来なくなっていた者、やったことはなかったが興味を持った者がいた。また自分の作品をどのように使うかについて想像を巡らせていたり、自身の中で意味を賦与したり、他者から役割として期待されるなど、作業によって新たな価値や意味が生まれていた。



V. まとめ

本研究の取り組みにより、陶芸に興味があったが施設設備、移動手段、移動能力等の理由により陶芸を行うことができなかった者に対しては、興味のある作業に取り組む機会を作ることができた。また一方で興味・関心がなかった者に対しては、初めて行う作業に取り組む機会を得ることや施設での過ごし方に新たな選択肢が増えることになった。いずれの場合も出張型の陶芸によってもその人の人生にとって新たな経験や意味を生み出す機会となる可能性が示唆された。

今回の研究により大学や専門職が直接施設に赴いて行う出張型サービスの基盤となり、今後陶芸だけではなく、他の手工芸や趣味活動への展開や新たな大学の地域貢献に示唆を与えると考える。今後はさらにスタッフや参加者に対しアンケートを行い、出張陶芸による効果を明らかにしていく。

